

白幡洋三郎

錦 仁

編著

原田 信男

都市歴史博覧

都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ

都市の誕生によって加速された、人間の文化の諸相を、
全19編の論考から探る書。

定価:本体4,700円(税別)

何が都市をつくるのか。
その都市からは何が生まれ、
何を新たにをつくっていくのか。

笠間書院

都市歴史博覧

都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ

白幡洋三郎

錦 仁

編著

原田 信男

常州大学図書館
藏 書 章

【編者紹介】

■白幡洋三郎（しらはた・ようざぶろう）

1949年、大阪府生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程在籍中に西ドイツ・ハノーファー工科大学に留学。京都大学農学部助手、国際日本文化研究センター助教授を経て、現在同センター教授。

著書に、『日本文化としての公園』（共著・八坂書房）、『プラトンハンター』（講談社／毎日出版文化賞奨励賞）、『近代都市公園史の研究』（思文閣出版）、『旅行ノススメ』（中公新書）、『カラオケ・アニメが世界をめぐる』（PHP研究所）、『大名庭園』（講談社）などがある。

■錦 仁（にしき・ひとし）

1947年、山形県生まれ。東北大学文学部文学研究科博士課程中途退学。秋田大学教育学部教授を経て、現在新潟大学現代社会文化研究科教授。

著書に、『中世和歌の研究』（桜楓社）、『在地伝承の世界【東日本】』（三弥井書店。徳田和夫・菊地仁）、『秋田県の民俗芸能』（秋田県教育委員会。井上隆明・齋藤壽胤ほか）、『浮遊する小野小町』（笠間書院）、『東北の地獄絵』（三弥井書店）、『小町伝説の誕生』（角川書店）、『金葉集／詞花集』（明治書院）、『なぜ和歌（うた）を詠むのか 菅江真澄の旅と地誌』（笠間書院）などがある。

■原田 信男（はらだ・のぶを）

1949年、栃木県生まれ。明治大学大学院博士後期課程退学、その後、角川文化振興財団角川日本地名大辞典編纂室勤務（非常勤）などを経て、札幌大学女子短期大学部専任講師翌年同助教授、同教授を経て、現在国士舘大学21世紀アジア学部教授。

著書に、『江戸の料理史』（中公新書／サントリイ学芸賞受賞）、『歴史のなかの米と肉』（平凡社／小泉八雲賞受賞）、『中世村落の景観と生活』（思文閣出版）、『和食と日本文化』（小学館）、『食をうたう』（岩波書店）などがある。

都市歴史博覧 —都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ—

2011(平成23)年12月15日 初版第一刷発行

編者 白幡洋三郎

錦 仁

原田 信男

発行者 池田つや子

発行所 笠間書院

〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-2-3

Tel.03-3295-1331 Fax.03-3294-0996

振替 00110-1-56002

ISBN978-4-305-70573-0

シナノ印刷・製本

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。出版目録は上記までご請求ください。

著作権はそれぞれの著者にあります。

<http://kasamashoin.jp/>

都市歴史博覧

都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ

本書の意図

.....白幡洋二郎

都市は人間の集住地として新しい文化を創造する力を強く持っている地域である。人間の文化は、間違いなく都市の誕生によって加速された。都市は文化誕生の大いなる母体であり、文化の多様さは都市ならではの産物である。

本書は、都市ならではの産物としての「都市文化」を考えることを通じて、これまで気がつかなかったような日本の「発見」をめざそうとする。

従来、都市の発生とその後の都市の発展史を対象とする研究は多く行われてきた。また都市を含め、個別地域における文化の特徴と地域文化同士の関連をさぐる研究もよく行われてきた。都市とその構造に関する研究は地理学・考古学などによって行われ、他方で地域文化に関しては、文化人類学や文化史学などによる研究が個別に行われて

きた。

しかしながら都市の構造面における特徴と地域における個別文化との関わりを包括的に考察することにより、特徴ある都市文化の全体を比較史的に検討しようとする試みはこれまでほとんど見られなかった。

本書は、二〇一〇年二月に国際日本文化研究センターで行われた国際研究集会の報告であり、また、二〇〇七年から三年間続けてきた共同研究会「都市文化とは何か」の一つのまとめでもある。共同研究会では従来の都市構造研究と地域文化研究とを連携させ、総合的な都市文化研究を行うことをめざした。「都市文化とは何か？」という直接的な問いを立てることによって、文化の諸相をはじめ、多様な都市のあり方と都市の発達、都市構造の特徴と地域文化との関連を多面的に明らかにしようとしたのである。

日本の都市文化を考えると近世から近代への都市（集落）の変容は重要であり、その際に有用と思われる数字がある。要約すれば江戸時代の村の数は約六三、〇〇〇余りであったが、これが明治期に一五、〇〇〇強の自治体に編制され、それが現代では一、七〇〇余りに整理されたのである。その間、日本の総人口はおおよそ三、〇〇〇万人から一億二、〇〇〇万人になった。以上の数値の変遷は行政上の再編成によるものであり、集落景観や住民の数・構成はほとんど変わらない場合も考えられるが、やはり、この数の変化は、日本の集落の都市化への大きな流れを映し出していると考えてよいだろう。小さな集落が全国に無数に散らばる村単位の社会が、規模の大きい（行政）都市単位の社会に変わっていったのである。

いまや全国どこにも都市的暮らしがあるとも言える現代の日本に、農村や地方とは異なる、都市ならではの文化、習慣や生活様式はあるのだろうか。都市のあり方を問い、文化とは何かを考えることによって、日本を再発見するさまざまな見方を見つけ出そうとの試みが本書の意図である。

もくじ

序

都市はぜいたく…………… 002

◆白幡洋三郎

第一部 なりたち

1 復元・永無瀬離宮——後鳥羽上皇の庭園都市…………… 022

◆豊田裕章

2 「城市」と「食産」——中国の都市文化…………… 046

◆金 哲会

3 中世都市の描き方——南フランスにおける都市の表象とアイデンティティ…………… 072

◆図師宣忠

4 絵入り都市案内書の誕生——清末上海の出版文化と日本…………… 096

◆唐 権

第II部 しくみ

- 5 日本庭園における西湖モチーフの具現化——景觀表現の源泉を探る……………126
◆李 偉

- 6 自然地域に移動する都市文化——現代アートによる里山と里海の再発見……………150
◆西田正憲

- 1 中世パリと「水の商人」——パリのハンザ、水運ギルドの盛衰……………170
◆天野史郎

- 2 『春日権現験記絵』に描かれた藤原俊盛邸の庭園……………190
◆小野健吉

- 3 藩主の巡覧記——仙台藩主と秋田藩主……………212
◆錦 仁

- 4 世界一周ツアーと実業家たちの日本発見
——東京・大阪兩朝日新聞社主催「世界一周会」をめぐって……………240
◆竹村民郎

第Ⅲ部 たのしみ

- 5 欲望都市・上海の誕生とその表象……………266

◆劉建輝

- 6 都市文化と現代の文化政策——文化アイデンティティの喪失と再生……………284

◆端信行

- 1 中世チエコにおけるアルコール飲料——都市とビールの結びつき……………312

◆藤井真生

- 2 粋から萌へ——現代サブカルチャーの起源としての近世都市文化……………334

◆奥野卓司

- 3 近世庭園の遊び方——劇場と化す都市の庭園……………350

◆町田香

- 4 江戸のなかの異文化……………370

◆原田信男

5 大衆演劇劇場探検記…………… 398

◆パスカル・グリオー

6 「房(バン)」の系譜——現代韓国の都市文化…………… 418

◆申 昌浩

共同研究会記録…………… 444

共同研究参加メンバー一覧…………… 448

執筆者紹介…………… 449

序

都市歴史博覧—都市文化のなりたち・しくみのしめし—

都市はぜいたく

白幡洋三郎

都市文化とは何か。それは「都市ならではのモノやコト」「都市ならではの魅力」であろう。都市近郊農村に生まれ都市で暮らした俳人・与謝蕪村の作品や都市・江戸を厳しく批判した儒者・荻生徂徠の論考などから、都市の魅力を生む大事な感覚が「ぜいたく」（奢侈）であることを述べる。幕末・維新期を生きた福沢諭吉にとって、横文字や洋書が身近に存在し、容易に手に入るような異文化の豊かさこそ都市ならではの「ぜいたく」であり、都市の文化性のあかしであった。「ぜいたく」の感覚こそが都市の本質を示す重要な指標Ⅱ「都市はぜいたく」であることを論じる。

各時代には、時代ごとに特色あるそれぞれの都市文化があるだろう。では、都市文化という一言で概括できるような、時代を超えて存在する文化事象を取り出すことは可能だろうか。言えるのは、新しい時代には新しい時代の求める特徴的な「都市文化」が現れてきたということであろう。人間の基本的な生活関連項目である、衣・食・住にかかわるいくつか思い浮かべてみても、それまでなかった新たなものが、あるときから出現した歴史を指摘でき

る。

近世以降の社会に登場したとされる多くのものから、いま思いつくままにあげてみよう。たとえば衣類で言うところ、江戸時代前期・元禄時代の花見どきに女性がこぞつてつくらせ、身にまとったという花見小袖、食で言えば江戸後期に現れた屋台のにぎりずし、そして住で言えば武家や文人など一定の階層以上が自宅に備えた書斎など。それらはそれぞれの時代に生まれた特色ある「都市文化」の一端を示すといつてよいだろう。

その一方で、時代を超えた「都市文化」の本質はあるのだろうかという疑問は消えない。花見小袖、にぎりずし、書斎などが江戸時代の都市で生まれ、江戸時代の都市で発達し消費されたことは了解できる。だからといってそれらが都市文化を代表し、都市文化とはなにかを十全に説明してくれるわけではないからだ。花見小袖、にぎりずし、書斎という三つの都市文化から、都市文化とはいったいどんなものか、特徴を抽出できるかと問われれば難しいと答えるほかない。検討する事象の数を増やしたとしても、都市文化の抽象化は容易ではない。

時代を貫く「都市文化」の定義は可能か否か。多くの人々が求める、都市的なものとは何か。時代を超えて人々が共通に欲しがる「都市文化」はあるのかないのか、と問う気持ちは満足させられない。

人が都市に求め、都市に群がるものになるさまざまな「ちから」の源泉を仮に「都市文化」と名付けておこう。人を都市に引きつける「ちから」の源泉を「都市文化」と見なし、それはどのようなものをいくつかの角度から考えてみたいと思うのである。

1 都市はみやこぶり——与謝蕪村「春風馬堤曲」を手がかりに

与謝蕪村（一七一六—一七八三）は摂津の淀川べりの村、毛馬村で生まれ育った。現在の大阪市都島区毛馬の一帯である。毛馬村は、京都南部から南西方向に流れ下ってきた淀川が大坂の都市部に入る前に通過する。（図1）



図1 「淀川兩岸一覽」に描かれた毛馬

淀川の流れは当時とはだいぶ流路が変わってはいいるが、両岸が大きな堤で守られているのは今も同じである。

蕪村はある手紙の中で子供の頃、春のうらかな日には、きまって毛馬の堤で友達と遊んだ（「余、幼童之時、春色清和日ニハ、必友どちと此堤上ニのぼりて遊び候。」と書き残している。毛馬村を流れる淀川の土手。そこは蕪村の楽しい遊び場であった。）

その後、故郷の毛馬村をあとにした蕪村は江戸に出て俳諧の道に入り、諸国遍歴のち京都に住んだ。毛馬村の蕪村の生家は、貧しいとはいえない農家ではあったが、地理的には都市近郊農村であり、当然暮らしは田舎風に染まっていただろう。

蕪村は田舎に生まれ、各地を見て歩き、後半生は都市に暮らした人物であるといえよう。長く住んだ都市・京都を愛したが、その蕪村が晩年六十二歳の時につくった俳詩「春風馬堤曲」（安永六年「一七七七」）には、故郷の田舎・農村への懐かしい気持ち深く込められているのがわかる。また毛馬から近かった大都市・大坂、すなわち浪速（浪花）の都会性が、ただ物理的な距離感だけでなく心理的にも複雑な遠近の想いを込めて詠まれ、都市と田舎の差異のみならず都市と田舎の双方に対して当時の人々が抱いていたであろう心情の一端が鮮やかに浮かび上がってくる。京・大坂・近郊農村の三つがそれぞれ特徴を持った違う文化圏と

して見事に描かれているのである。

この作品からは、蕪村が生きた十八世紀日本において、都市と農村がどのように区別されていたか、またどのように受け止められていたか、その心理的位置関係が深く感得される。日本では都市はどのような場所と考えられていたか、どのように評価・判断されていたか、など日本近世の都市文化を考える上でこの作品は格好の資料である。^{▼まき}

「私はある日、古い友人をたずねて故郷を訪れた。淀川を渡り、毛馬の堤を過ぎたところで、たまたま帰郷する（二人の）娘さんに逢った。」（余、一日、耆老ヲ故園ニ問フ。澱水ヲ渡リ馬堤ヲ過グ。偶女ノ郷ニ帰省スル者ニ逢フ。）という仮構と思われる舞台設定からこの俳詩は始まるのだが、それが仮構の舞台設定であることは次のような事実から判明する。蕪村はこの作品を出版した直後の安永六年（一七七七）二月二十六日、伏見に住む二人の門人、「柳女」と「賀瑞」（二人は母娘である）に手紙を送っている。^{▼注4}その中にこの作品の着想・成立の事情を説明するくだりがある。手紙の冒頭には時候の挨拶等が書かれており、その次にこの作品「春風馬堤曲」とその創作の秘密を明かすかのような文章が続く。原文の味わいを損ねないために、まずはその部分を直接引用しておこう。

一、春風馬堤曲 馬堤ハ毛馬塘也。則余が故園也。

余、幼童之時、春色清和の日ニハ、必友どちと此堤上にのぼりて遊び候。水ニハ上下ノ船アリ、堤ニハ往来ノ客アリ。〔其中にハ、田舎娘の浪花ニ奉公して、かしこく浪花の時勢粧に倣ひ、髪かたちも妓家の風情をまなび、□伝しげ太夫の心中のうき名をうらやみ、故郷の兄弟を恥いやしむもの有。〕されども、流石故園ノ情に不堪、偶親里に帰省するあだ者成べし。浪花を出てより親里迄の道行にて、引道具ノ狂言、座元夜半亭と御笑ひ可被下候。実ハ愚老懷旧のやるかたなきよりうめき出たる実情ニて候。〔注〕、□は虫喰い部分、阿で

あろうとの説が有力。この当時、阿伝という浄瑠璃の名手がいて大いに人気を博していたという。また夜半亭とあるのは、蕪村が明和七年（一七七〇）に継承し名乗った俳諧の一派の名。）

琵琶湖を発した淀川は南流し、桂川、宇治川と合流して京都を過ぎ南西に流れて途中の淀や枚方などを経て大坂に至る。大坂に至る前に通過するのが蕪村の生まれた毛馬村である。

「春風馬堤曲」は蕪村がある年の藪入りの一日、故郷の老人を訪れた折に詠んだものという設定である。それもちようど毛馬の堤上で、蕪村と同じくこのあたりの故郷へ里帰りする娘に偶然出会い、この娘としばらく共に歩み、言葉を交わした、との状況を設定して創作されている。そして上記の手紙にも、蕪村がこの娘を通して感じた当時の人々の都市への思い、都市文化への複雑な心境が見事に説明されている。

上掲のへで示した部分（其中には、田舎娘の……恥いやしむもの有。）を現代語で表現してみると、「……田舎娘だったのが大坂へ奉公に出て、いつしか都会の流行に染まり、派手な服を着たり、髪型をはやりの形にしたり、また人気浄瑠璃の心中話にあこがれたりもする。そして故郷の兄弟が田舎風なのを、恥ずかしく感じ、さげすむような気持ちも湧いてくる。……」といった感じであろうか。そして蕪村は「春風馬堤曲」中では、次の句を書き記した。

「やぶ入りや浪花を出て長柄川」

娘の心情や行動の全体がここに表現されている。この句で蕪村が用いた「浪花」は「都市文化の繁盛している地」を、「長柄川」は田舎娘の出身地「都市文化の乏しい田舎」（への戻り口）をあらわしているだろう。「都市」や「都会」の語は使われていないが、「浪花」が華やかな都市・都会の代表として使われている。

「春風馬堤曲」から一〇年足らず後に刊行された『摂津名所図会』（一七九六―九八）には、都市・浪花の水運の玄関口である八軒屋の賑わいが描かれている。時代は下るが、幕末の文久年間（一八六一―）に出版された『淀川